説教余滴、人を結び付けた

ある日の朝日新聞朝刊に、ハンセン病に関する記事がありました。たいへん示唆に富むものですので、ご紹介します。《心結ぶハンセン病支援》というタイトルです。

中国　広東省潮州市郊外に嶺後（リンポウ）村がある。

「村は 1960 年、ハンセン病患者 300 人以上が集められて出来た。80 年代に回復者の帰宅が許された後も、差別で行き場を失った人々が残った。・・・」。元隔離村です。

この村で、ひとりの日本人青年が、2002 年秋以来、ハンセン病患者を支援している。原田燎太郎さんは、早稲田大学の四年生の時、自分を磨く居場所を求めて此処へ来た。

「進路が決まらず、居場所を捜していた。そんな心に村がすぽっとはまった」。

地元の大学に協力を求め、住宅の建設からはじめた。

「日本人を憎んでいたが、彼らは私たちを差別せず、家まで建ててくれた。信じられないことだ。時代は変わったと思った。」このように現地の人々は言う。

この活動は広がり、今では中国南部 50 箇所に達する。会員は学生を中心に約 2000 人。中国で外国人主導のＮPO が此処まで発展するのは珍しい。記者の言葉だろうか。次の言葉で記事の最後は締めくくられた。

「人と人との関係を壊してきたハンセン病が、今度は人を結び付けた」。

この記事には署名（広州＝小林哲）がありました。

この活動のいたるところに、現代日本で言うような癒しがあります。元患者さん、日本青年、現地の学生さんや会員たち、皆が居場所を見付け、赦しを知り、心豊かに生きています。共に生きるようになりました。これこそ主イエスのいやしの本質です。

主イエスは、この病気の人に対し何をなさった

でしょうか。この病者は、跪き、
「御心ならば、私を清くすることがおできになります」と言います。